

お月様の唄

豊島与志雄

青空文庫

お月様の中で、

尾おのない鳥が、

金の輪をくうわえて、

お、お、落ちますよ、

お、お、あぶないよ。

勢いい
むかしむかし、まだ森の中には小さな、可愛かわいい森の精達おおぜが大
勢いい
いました頃のこと、ある国に一人の王子がいられました。王

様の一人子ひとりごでありましたから、大事に育てられていました。王子はごくやさしい、心の美しい方でした。

王子は小さい時から、どういふものか月を見るのが非常に好きでした。よくお城の櫓やぐらに上ったり、広いお庭に出たりして、夜遅くまで月を見ていられました。月を見ていると、亡くなられたお母様を見るような気がしました。母の女王は、三歳の時に亡くなられたので、王子はその顔も覚えていませんでしたが、どう考えてもお母様は月に昇ってゆかれたように思われてなりませんでした。それで、じつと月を見ては亡くなられたお母様のことを考えていられました。

王子が八歳になられた時、ある晩やはりいつものように庭に出

て、一人で月を見ていられますと、どこからともなく一人の小さな、頭にやぐるまそう矢車草の花をつけた一いっしやく尺ばかりの人間が出て来ました。そして王子の前にひよつこりと頭を下げました。

王子はびつくりされました。そんな小さな人間はまだ見たことも聞いたこともありませんので。けれども、王子は姿はやさしく心は美しい方でしたけれど、後に国王となられるほどの人でありますので、非常に強い勇氣を持っていられました。それで落ち付いた声で、一いっしやくほうし尺法師にたずねられました。

「お前は何者だ？」

一尺法師は歌うようなちようしで答えました。

「森の精じや。お城のうしろの、森の精じや」

王子は微笑^{ほほえ}んでまたきかれました。

「何しに来たのだ？」

「王子様をお迎えに」と一尺法師は答えました。「千草^{ちくさ}姫^{ひめ}のお
使いで、お城のうしろの森の中まで、まあずまずいらせられ」

そう言ったまま森の精は、向こうをむいて歩き出しました。王子は非常に喜ばれて、その後について行かれました。城の裏門の所^{まい}まで参りますと、門がすうっと一人で開きました。森の精と王子とがそこを出ると、門はまた元の通り音もなく閉じてしまいました。

城のすぐうしろには、白^{しら}樫^{がし}の森と言われている大きな森がありました。森の精はその中にまっ直^{すぐ}にはいってゆきました。王子

も黙ってついて行かれました。ところが森の中程なかほどに来ると、ふいに森の精の姿が見えなくなりました。王子はびっくりしてあたりを見廻されますとすぐ前に森の中に広い空地あきちが開けていまして、青々とした芝が一面に生えており、その中にいろいろな花が咲いていました。芝地しばちのまん中には、赤や黄や白の薄い絹きぬの衣ころもを着、百合ゆりの花の冠かんむりをかぶった、一人の女が立っていました。そして王子を見て、微笑ほほえんで手招きしました。それを見ると王子は、何だか亡くなられたお母様を見るような気がして、恐れおそれ気げもなくその側に寄ってゆかれました。

「まあよく来られました」とその女は言いました。「私は千草ちぐさひ姫めと申すこの森の女王でございます。今おもしろいことをご覧らん

に入れましよう」

そして千草姫は、声を高めて言いました。

「王子様のもてなしに、みんな出て来て踊っておくれ」

すると、どこからともなく芝地の上に、さっきのような森の精が一人飛び出してきました。薔薇ばらの花を一つ頭にかぶっていました。そして次のように歌いながら、くるりと廻りました。

ひいとつ　ひとつ

くるりと廻って、まゝた出る。

すると、菊きくの花をつけた森の精が出て来ました。それから二人でまた歌って踊りました。

ふうたつ、ふたつ、

くるくる廻つて、まゝた出ろ。

牡丹ぼたんの花をつけた森の精が出て来ました。

みいつつ、みつつ、

くるくる、くゝるり、まゝた出ろ。

梅うめの花をつけた森の精が出て来ました。

よゝつつ、よつつ、

くるくる、くるくる、まゝた出ろ。

桜さくらの花をつけた森の精が出て来ました。

いゝつつ、いつつ、

いっしよにみんな、とんで出ろ。

王子様のもてなしに、

わあそび、こそび、

くるりと廻つて、くるくるり。

すると、眼の前の芝地しばちは森の精でいっぱいになりました。みんな頭には、いろんな草や木の花を一つずつつけていました。そして手をつないで、円まるく輪になっておもしろい唄を歌いながら踊りました。

王子はそれを見て、夢のような心地こころちになりました。森の精の踊りはいつまでも続きました。いくら続いても飽あきないほどのおもしろい踊りでありました。

「お時間じゃ、お時間じゃ。御殿ごてんのしまるお時間じゃ」と、どこからかふいに声がしました。すると今まで踊っていた森の精達が、

一度に高く飛び上がったかと思うと、地面に落ちつく時にはもう姿がなくなっていました。

王子はびつくりして、あたりを見廻されますと、千草姫ちくさひめはやはり微笑ほほえんだまま立っていました。そして王子に言いました。

「もう遅くなりますから、今晚はこれきりにいたしましょう。またお迎えをあげますから、その時に来て下さいませ」

王子はもつとそこにいたく思われましたが、姫からそう言われて仕方なしに帰られました。いつのまにか、矢車草やぐるまそうの花をつけた森の精が出て来て、王子を城の庭まで送って来ました。

それから王子は、月のある晩はたいてい白^{しら}樫^{がし}の森の中に行つて、森の精達と遊ばれました。その上千草姫からいろんなことを教えられました。森の精達は、もとは野原に住んでいる野の精でありましたが、野原が開かれてたんぼにされてしまいましたので、今では森の中に隠れてしまつて、森の精となつたのでした。そして千草姫は、新しい森の精と元からの森の精との女王となつていたのでした。それで姫は元の野原のことも、今のたんぼのことも、前からすっかり知っていました。今年の夏にはひでりがあるとか、秋には洪^{こう}水^{ずい}があるとか、そういうことを前から言いあてました。王子はそれを聞かれると、いちいち父の国王に申し上げました。

国王は笑われましたが、王子があまり何度も申されますので、おしまいには試こころみにその用心をされました。

夏にひでりがしましても、山奥の泉から水が引いてありましたので、百姓達は少しも困りませんでした。秋のはじめに洪こうずい水が
出ましても、前から川の堤つつみが高く築かれていましたので、少しも
田畑を荒しませんでした。そして王子の言葉がいちいち当たるの
で、王様はじめ御殿中ごてんの者は皆、大変に驚きました。いつとはな
く、「王子は神様の生まれ変わりだ」という評判が国中に広まり
ました。王様はどうして先のことを知ることが出来るのか、いろ
いろ王子にたずねられましたが、王子は千草ちぐさひめ姫から堅く口止め
をされていましたので、何とも答えられませんでした。そして遂

には王様まで、自分の子は神の生まれ変わりではないかと思われ
るようになりました。

けれど、王子にも、ただ一つ自分の思うようにならないことが
ありました。それは毎晩月を出すことが出来ないことでありまし
た。月が輝いた晩でなければ、千草姫は迎えにきてくれませんで
した。

宵よいに月が出る時は、いつも矢車草やぐるまそうの森の精が御殿の庭まで迎
えに来てくれました。王子は千草姫の所に行つて、御殿の戸がし
まる十時少し前に帰つて来られました。

ところがある晩、いつものように白しら樫がしの森の中の芝地しばちへ王子
が行かれますと、千草姫は非常に悲しそうな顔をして立っていま

した。またその晩は、森の精さえ一つも出て来ませんでした。王子は何となく胸をどきどきさせながら、姫にたずねられました。

「今晚はどうなされたのです」

「今に悲しいことが起こって参ります」と千草姫は答えました。

王子はいろいろたずねられました、千草姫はどうしてもわけを言いませんでした。ただ「今にわかります」と答えるきりでした。

王子と千草姫ちくさひめとは黙って芝地しばちの上に坐っていました。月の光

りが一面に落ちて来て、草の葉や花びらや木の葉をきらきらと輝かしていました。やがて千草姫はほつと溜息ためいきをついて言いました。

「もうお目にかかれないかも知れませんが」

それをきくと、王子は急に悲しくなりました。

「お時間じゃ、お時間じゃ、御殿ごてんのしまるお時間じゃ」と、うしろで歌う声が聞こえました。

見ると、いつのまにか矢車草やぐまるそうの森の精がうしろに立っていました。それでも王子は帰ろうとされませんでした。けれど千草姫は、むりに王子を慰なぐさめて帰らせました。

王子にはどうしても、千草姫に逢えないというわけがわかりませんでした。そして「千草姫は自分の亡くなったお母様ではないかしら」と、ふと思われました。それで、たずねてみようと思つてふり返られると、もう千草姫はそこにいませんでした。

王子は御殿の庭に立ったまま、も一度千草姫に逢わなければな

らないと決心されました。

三

それから王子は、月のある晩はいつも庭に出て、森の精を待たれました。けれど森の精は一向いつこう迎えに来てくれませんでした。

王子は悲しそうにお城の裏門の方を眺められました。その鉄の戸は厳しく閉め切っておりまして、いくら王子の身でも、それを夜や分ぶんに開かせることは出来ませんでした。

王子はいろいろ思い廻された上、遂にお守もりやく役やくの老女ろうじよにわけ話を話して、白しら樫がしの森に行けるような手段てだてを相談されました。老

女は大層王子に同情しまして、いいことを一つ考えてくれました。
た。

ある日王様が庭を散歩していられます所へ、王子と老女とが出て参りました。老女はこう王様に申し上げました。

「このお庭は、月夜の晩はそれはきれいでございますけれど、あまり淋しすぎます。お月見の時に一晩だけお城の門をすっかり開いて、城下の人達を自由にはいらせて、皆で踊らせたらどんなにかおもしろいこととございませう」

王子も傍から申されました。

「それはおもしろい。お父様、そういったそうではございませんか」
二人がしきりにすすめますものですから、王様も承知なさいま

した。そしてすぐに、その用意を家来けらいに言い付けられました。

その晩は大変な騒さわぎでありました。王様は櫓やぐらに上がつて、大おおぜ

勢いの家来達と酒宴しゅえんをなされました。お城の門は表も裏もすつ

かり開け放されて、城下の人達が大勢はいつて来ました。皆美し

く着飾きかざつて、お城の庭で踊りを致しました。方々でいろいろな音

楽も奏そうされました。晴れた空には月が澄みきっていました。燈火あかり

は一切ともすことが許されませんでした。お城全体が、月の光り

と音楽と踊りといい香においとで湧わき返るようでした。

王子はお守役の老女と二人で、そつと裏門から忍び出られまし

た。そして老女を白櫛しろかしの森の入口に待たせて、自分一人森の中に

はいつてゆかれました。

ところが例の空地あきちの所まで行かれましても、誰も出て来ませんでした。

あたりはしいんとして、高い木の梢こずえから月の光りが滴したたり落ちて
いるきりでした。お城の中の賑にぎやかな騒さわぎが、遠くかすかにどよ
めいていました。

王子は長い間待っていてられました。眼に涙をためて、「千草ちぐさひ
姫め、私です！」とも叫ばれました。けれども姫も森の精も姿さ
え見せませんでした。

とうとう王子は涙を拭ふきながら、思い諦めて戻ってゆかれまし
た。森の入口で待っていた老女が何かたずねても、王子はただ悲
しそうに頭を振られるのみでした。

王子は考えられました。なぜ千草姫は出て来てくれないのであろう。悲しいことが起こると言われたがそれはどんなことだろう。姫は亡くなられたお母様のような気がするが、ほんとにそうだろうか。なぜ私に何にも教えてはくれないのかしら。

そのうちに、悲しいことというのが実際に起こって来ました。城下のある金持が、白しら樫がしの森の木をすっかり切り倒して材木にし、その跡を畑にしてしまうというのです。城下にはだんだん人がふえてきました、新たに家を建てる材木がたくさんいますし、五穀ごこくを作る田畑もたくさんいるようになったのです。誰も反対する者がなかったので、王様も金持の願いを許されました。

王子はそれを聞かれて非常にびっくりされ、いろいろ王様に願

われましたが、もう許してしまったことだからといって、王様は聞き入れられませんでした。

王子は悲しくて悲しくて、毎日ふさいでばかりいられました。けれどもそんなことには頓とんちやく着なく、白檜の森は一日一日と無くなつてゆきました。

ただ不思議なことには、森の大きな木が切り倒される度たびに、いろんな声がどこからともなく響きました。——鳥、鳥、赤い色——鳥、鳥、青い色——鳥、鳥、紫——鳥、鳥、緑色——鳥、鳥、白い色……そしてその度ごとに、赤や青や紫や白や黒や黄やその他いろんな色の鳥が、森から飛んで逃げました。王子は森の側に立つて、鳥の飛んでゆく方を悲しそうに眺められました。

けれども、きこり共にはそれらの声が少しも聞こえませんでしたし、また彼等は、いろんな色の鳥を見ても別に怪しみもしませんでした。森の木はずんずんなくなつてゆきました。

いよいよ、森の奥の空地あきちの近くまで木がなくなつた時、王子はもうじつとしていることが出来なくなりました。その日の晩は、ちようど満月で、いつもより月の光りが美しく輝いていました。

王子は一人で、お城の裏門の所まで忍び寄りましたが、門は堅く閉め切つてありました。王子は、口惜くやし涙にくれて、誰か門を開いてくれるまでは、夜通しでもそこを動くまいと、強い決心をなされました。

その時、不思議にも、門の戸がすうつと独ひとりでに開きました。

王子は夢のような心地こころちで、そこから飛び出してゆかれました。

四

木が無くなった森の跡は、ちょうど墓場はかばのようでした。大きな木の切株きりかぶは、石塔せきとうのように見えました。王子はその中を飛んでゆかれました。まだ木立こだちが残ってる奥の方の空地の所まで来て、王子はほっと立ち止まられました。見るとそこには誰もいませんでした。「千草姫ちくさひめ！」と王子は叫ばれました。何の答えもありませんでした。

しばらくすると、王子のすぐ側でやさしい声が響きました。

「王子様！」

王子はびつくりされて、今まで垂れていた頭を上げて見られると、そこに千草姫ちぐさひめが立っていました。王子はいきなり姫にすがりつかれました。

「よく来て下さいました。とうとうお別れの時が参まいりました」と姫は言いました。

王子は嬉しいやら悲しいやらで、口も利きけないほどでありましたが、しばらくすると、いろいろなことを一緒に言ってしまわれました。

「なぜお別れしなければならぬのですか。なぜ私をちつとも迎えに来て下さらなかつたのですか。お月見の晩にここに来ました

のに、なぜ逢つて下さらなかつたのですか。あなたは亡くなられたお母様ではありませんか。言つて下さい。私に聞かして下さい。私はもう側を離れません。お城の中にも帰りません」

千草姫は何とも答えませんでした。そして王子の手を取つたまま、芝生しよせいの上に坐りました。

「私はあなたのお母様ではありません。けれど私を母のように思われるのは、悪いことではありません。私達は、あらゆるものを生み出す大地の精なのですから。ただ悲しいことには、いつかは私達の住む場所がなくなつてしまふような時が参まるでしょう。私達は別にそれを怨うらめしくは思いませんが、このままで行きますと、かわいそうに、あなた方人間は一人ぼっちになつてしまいますで

しよう」

王子はその言葉を聞かれると、何故なぜともなく非常に淋しく悲しくなられました。そして二人は長い間黙つたまま、悲しい思いに沈んでいました。月がだんだん昇つてきて、ちようど真上になりました。

その時、千草ちくさひめ姫はふと頭を上げて月を見ました。「もうお別れする時が参まいりました。これを記念にさし上げますから、私と思つて下さいまし」

そう言つて、千草姫は片方の腕輪うでわを外はずして王子に与えました。

その時、どこからともなくいろんな色の小鳥が出て来て、千草姫のまわりを飛び廻りました。王子はびっくりしてその小鳥を眺

められました。

「これでお別れいたします」

そういう声がありましたので、王子はふり返って見られると、もう千草姫の姿は見えないで、そこにまつ黒な大きい鳥がいました。くちばしに千草姫の片方の腕輪をくわえて、羽は皆ゆり百合の花びらの形をしていました。

その鳥は王子の方へ一つ頭を下げたかと思うと、もう翼を広げて飛び上がりました。王子は一生懸命にその尾おにすがりつかれますと、尾だけがぬけ落ちて王子の手に残りました。あたりの小鳥は悲しい声で鳴き立てましたが、もう森の精ではなくて鳥になっていますので、その意味は王子にわかりませんでした。

王子はぼんやり立っていられますと、どこからか矢車草やぐるまそうの花をつけた森の精が出て来まして、腕輪と黒い鳥の尾とを手にして
いられる王子を、お城の中へ送り返してくれました。

その後、白しら檜がしの森はすっかり切り倒されて畑になり、城下には立派な町が出来ました。けれどもどうしたことか、月が毎晩くも曇つて少しも晴れませんでした。そして次のような唄が、城下の子供達の間にはやり出しました。

お月様の中で、

尾おのない鳥が、

金の輪をくうわえて、

お、お、落ちますよ、

お、お、あぶないよ。

月の光りが少しもさしませんので、国中の田畑の物はよく成長しませんでした。草木が大きくなるには露と月の光りとが大切なのです。国中は貧乏になり、人々は陰気いんきになりました。それで王様も非常に困られて、位くらゐを王子に譲ゆずられました。

王子は、白しら樫がしの森の跡に、木を植えさして小さな森を作られ、その中に宮を建てて、千草ちくさ姫ひめからもらった腕輪うでわと鳥の尾とを祭られました。それから急いそに月が晴れ、五穀ごこくがよく実り、国中の者が喜び楽しみました。そして満月の度ごとに、お城の門もよおをすつかり開いて城下の者も呼び入れ、月見の会もよおが催もよおされました。

今でもその神社と森とは残っています。森の中にはいろんな色の小鳥がたくさん住んでいます。これは神社の前で小鳥の餌えを売ってる婆さんの話です。婆さんはその話をすると、いつもおしまいいには小さな声で「お月様の唄」を歌ってきかせてくれます。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お月様の唄

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>